

牛店
雜談

安愚樂

鍋
一名奴論建
貳編

上

10

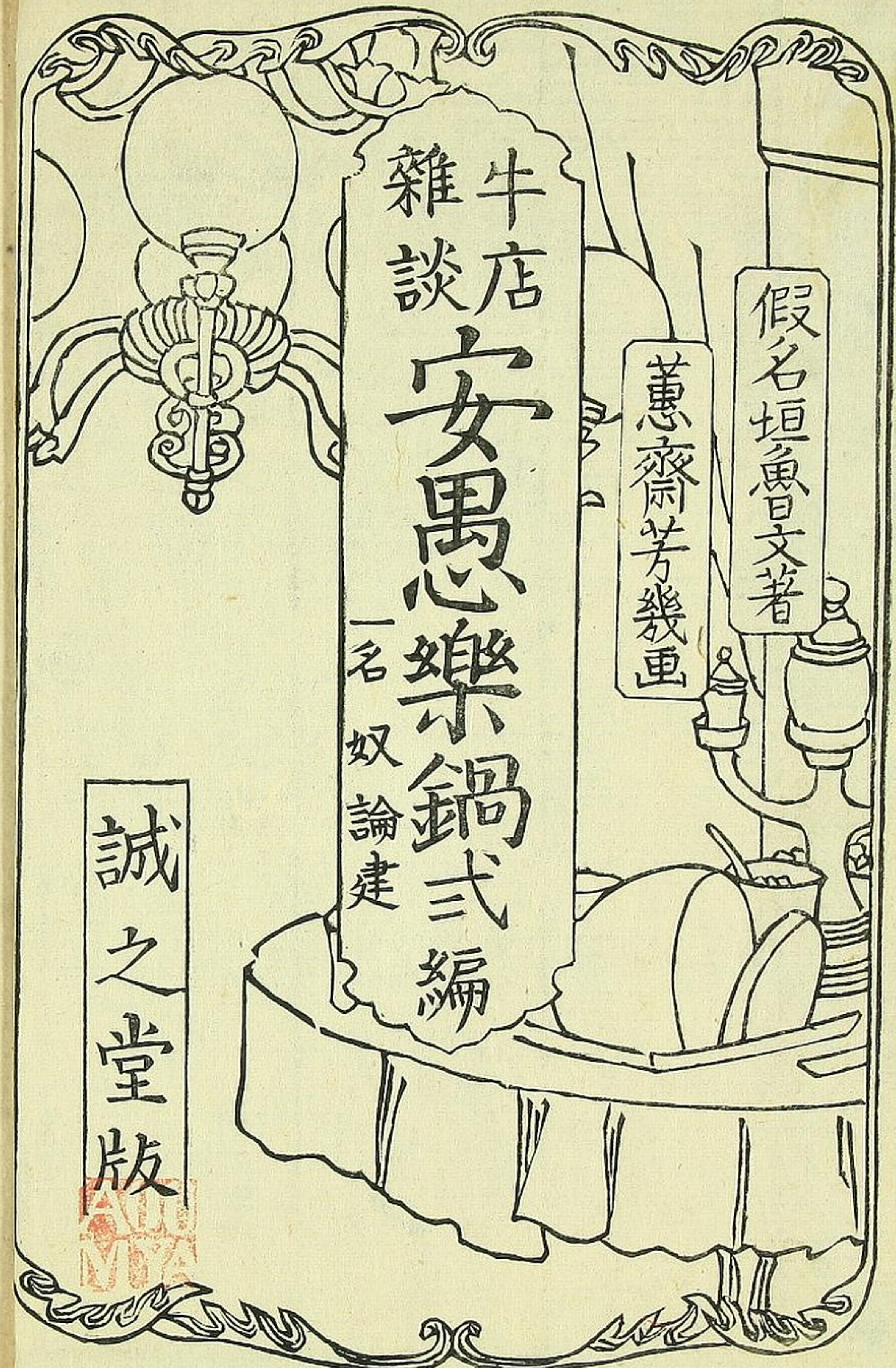
15

20

25

30

牛店 雜談 安愚樂鍋二編換序
 襍談 安愚樂鍋二編換序
 喘を問ふ宰也。何んぞ羊も亦も
 王者の如し。大宰の滋味。煮焼も
 一鍋之玉銅角火の程。皮を
 生身膽を乳と。各固水交際



假名垣魯文著

蕙齋芳幾画

牛店 雜談 安愚樂鍋三編

一名奴論建

誠之堂版

之汝を殺さば常なるは魚の酒

澁やそ邯鄲困る厚き治火を

福を以てつる我哀れを嗚呼

天乎嗚乎

考考成字題

西洋料理通跋 

鴨の脛乃短きも。鶴の脛は長きも。割煮の

法を得。塩梅の術を盡さば。豈憂ひ

悲むとあらん哉。情惟るに。莊周が猷立

伊尹の會席ハ板前の清く。俎箸法

直みそ。然も陰らぬ庖丁をねども。七五

三代^{えいぞう}法^{ほふ}古^こ風^{ふう}の傾^{かたむ}き。八^{はつ}珍^{しん}九^く献^{けん}の當^{あた}世^{せい}
に惚^{おぼ}れど。今^{いま}哉^や外^{がい}國^{こく}の珍^{しん}客^{かく}交^{かう}際^{さい}乃^{なり}
佳^か宴^{えん}をのめり。互^ご市^しの尽^{つく}むは郷^{きやう}食^{じき}應^{おう}も。
萬^{まん}里^り製^{せい}衣^いを異^{いと}り。飲^{いん}食^{じき}の設^{せつ}け等^{とう}類^{るい}
う。然^{しか}れども佳^か味^みの佳^か味^みは彼^か我^が同^{どう}一^{いつ}なり。
傳^{でん}聞^{もん}我^が邦^{はう}未^ま開^{かい}闢^{はく}さるるも。渾^{こん}沌^{とん}なる

鷄^{けい}の卵^{らん}を。筍^{しん}黄^{わう}やろ。とく食^{じき}をぶるも。
盛^{せい}運^{うん}星^{せい}霜^{そう}を。經^へて進^{しん}清^{せい}の露^ろの美^み汁^{じつ}と
形^{かたち}。濁^{だく}まる。売^うハ肉^{にく}種^{しゆ}となる。山^{さん}海^{かい}の珍^{しん}
味^み吐^と嗟^さふ辨^{べん}。精^{せい}飯^{はん}咽^{のど}の煩^{わづら}く。美^び食^{じき}
口^{くち}に飽^あて。遠^{とほ}く西^{せい}洋^{やう}の佳^か味^みを。餘^{あま}遙^{しやう}の
彼^か土^どの調^{てう}理^りを。学^{まな}ぶ。善^{ぜん}隣^{りん}の德^{とく}大^{おほ}なる哉^や。

偉おほなる哉やま。さるを馬ば乗のりと畜ちくふ者ものも。鶏けい
 豚とんを屠ころり。伐き氷こほりの家いへも。牛ぎゅう羊ぎやうと畜ちくむ。
 鶏けいと割きる。牛ぎゅう刀たうを用もちひ。我が鷲じうを食くふ。吐はき
 出でる。時とき勢いきも。從したがふ新しん奇きの膳ぜん部ぶ。よ
 機き小こ棄すとて調しらふ。肉にく箸しふ。菜さい魚ぎよの
 黍と山さん崩おちを。食く匙し。汁じゆの蒼そう倉そう海かい

量りやう川がわに。鳴な呼こ萬ばん物ぶつ開ひらく化くわる時ときも。
 萬ばん情じやう互たがひふ通つうむるの術じゆつ。此こゝ料りやう理り通つう三さん
 卷まきの天てん地ち人にんと籠かごまるとせん。欵くわん依よて後あとも
 一いつ口くわうを粘ねりく。以もちて跋はくと換かりて云い爾に。

明治新熟北門社之食客

假名垣魯文漫題

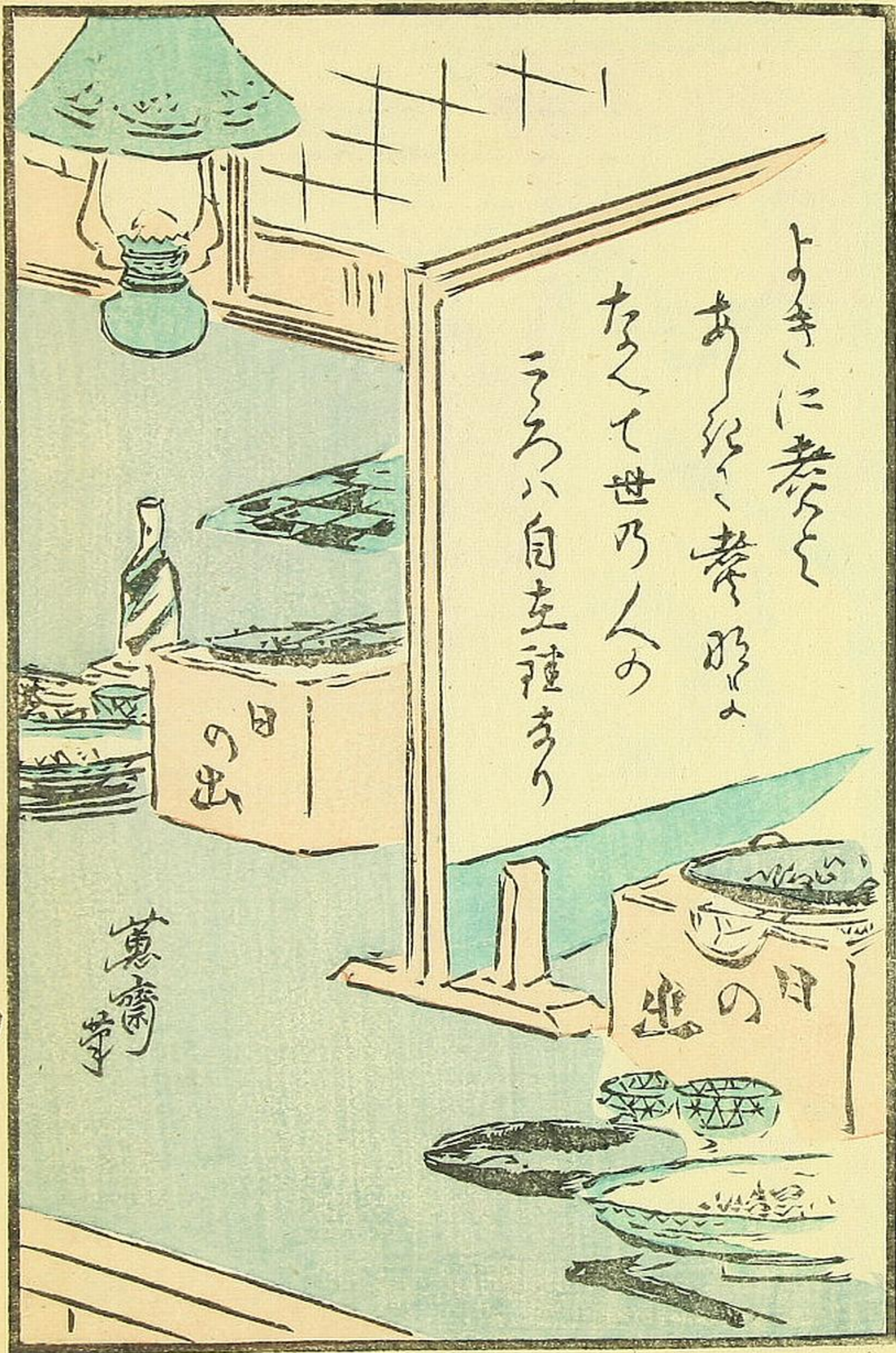


上三三

上三

酒之半 一斗六升
 車疾 似花 昔人 忘
 穀 融 能 食 大 年
 湯 房 牛 車 海 竟



よのきくに 考らる
 あらゆる 考らる
 たたくて 世乃人の
 こころハ 自立種あり

萬齋
 筆

牛店來客之寫真



○文相の
冠化

人物



○後免の
茶



○おきん
の

○かろ
の
女



○物
の
あ

き



○いん
の

○お
きん
の



○お
きん
の
ぶ
ろ
う
ま
ん



○復古の
朝臣



○あ
ま
り
の
ま
ん



○西洋
の

○あ
ま
り
の
ま
ん



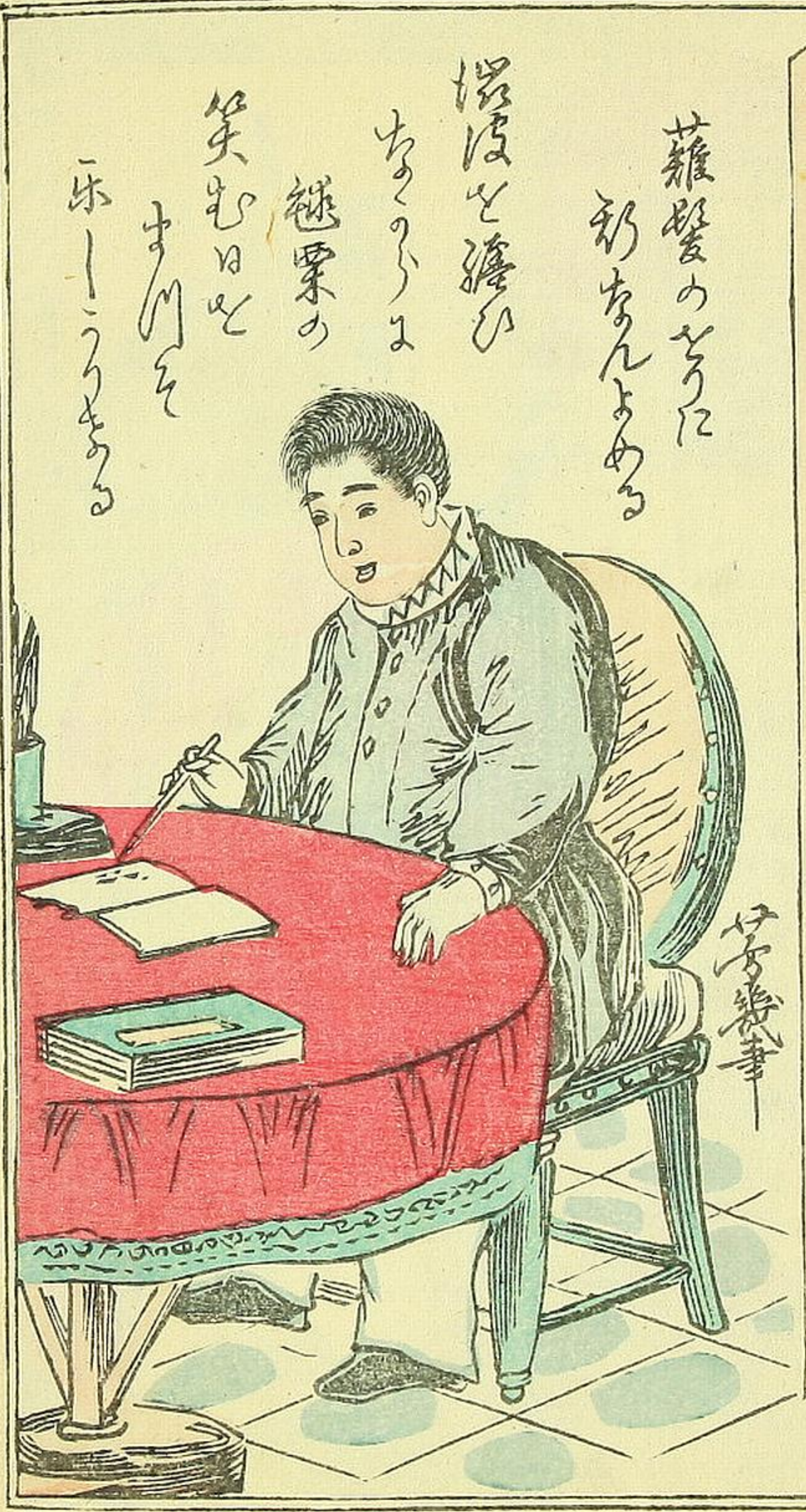
○お
ま
り
の
あ
ま
り
の
ま
ん
の
あ
ま
り
の
ま
ん
の
あ
ま
り
の
ま
ん



○お
ま
り
の
あ
ま
り
の
ま
ん

○あ
ま
り
の
ま
ん

魯文 名魯字文造一号 淺草 假名垣文藏
氷狐堂又黒牡丹



蘿發のやうに
初春のよめる
増後と續ひ
あつらふよ
継栗の
笑む日と
すめ
一ホーころもる

雑談 安愚樂鍋二編上 一名 奴論建

東京市隠 假名垣魯文戯作

傳染病の新聞の賣弘める牛肉の功能もむほしく
あらんと牛肉舗の主人角と折り肉と減一ちとせ
落し林涅尔孛斯土と病たる如く豫防ぐ手術もな
かりに他國の知らむ掛幕もあやしく畏さ
我邦の八百萬神達と親類一家のよしみあはれ忽地
例の神風に吹ちらめり晴天白日再び盛る牛店

の繁昌^{さかちやう}別^{わか}て此頃^{このころ}吉原^{よしげん}と新島原^{しんじまはら}乃^{すなは}立退^{たてひき}小物^{せうぶつ}は
 花^{はな}の花川戸^{はながわいど}販^{ばん}ふ人の山^{やま}の宿^{しゆく}あつる宵^よもつゝいひたふ
 泥^{どろ}に踏^{ふみ}こむ田町^{たまちやう}乃^{すなは}素見^{ひそみ}往^{むか}も復^{かへ}ると流行^{はやり}の牛肉^{うすにく}
 で杯^{さかづき}一^{いち}はくはく腹組^{はらぐみ}牛^{うし}の小使^{せうし}十八黨^{じゅうはちとう}むまぶ交^{まじ}り
 徒兒^{たご}の社中^{しゃちゆう}文明^{ぶんめい}開化^{かいけ}のざんざり何^{なに}とぞ王政^{おうせい}復^{かへ}古^{ふる}
 乃^{すなは}惣髮^{そうさつ}頭^{かう}因循^{いんじゆん}姑息^{こしやく}の半髮^{はんさつ}額^{がく}歌妓^{かぎ}と箱持^{はこもち}乃^{すなは}
 案内^{あんない}小属^{せうじゆく}娼妓^{ちやうぎ}の引手^{ひきて}は家婢^{けあひ}にひの^{ひの}色^{いろ}老若^{らうじやく}男^{おとこ}
 女^{をんな}の差別^{さべつ}なく。此^{こゝ}処^{ところ}に一群^{いっぐん}かゝりあつり。

三人^{さんにん}も色^{いろ}バ呼^よ出^でし。此^{こゝ}揚代^{やうだい}三十六^{さんじゅうろく}夕^{ゆふ}。当時改 ばじらふ
 智恵^{ちゑ}乃^{すなは}割前^{わりまへ}勘定^{かんとい}腎藥^{じんやく}ともしひと經驗^{けんげん}ハつて
 かゝ直^{ただ}り人力車^{にんりきや}元地^{もとち}のわらわらや花川^{はながわ}扉^{ひら}
 己^{おのれ}浮^うゝ駄洒^{だしゃ}落^おれ口車^{くちぐるま}。ちうんきやねホイと押^お出^でを
 あやうのおきけと生の鍋^{なべ}まが先^{まへ}さばハトきりの
 替^かるぐの人心^{にんしん}所謂^{すゐご}のそき機^が關^{かん}あらん軟^ら作^{さく}者^{しやくしや}
 の口調^{くちてう}ハ三馬^{さんば}く さてこそ、うらひらんりの
あやわやの序きでま そのとめ口章^{くちしやう}
 千ヨシノくくくくくく千ヨシノくくく千ヨシノ

トモ

二

よりのうぶしをきんていしうとてしむれどあまの内のお客
ごうごふ初きごうごうとあめりて目をねむつとつと
めるとなごあつとてあごうとてきんていしうとてきんていしうと
はくであびと解てうきつふとあうるううてヨモウく
あたま小うき入き中てつとあうるうとていしうとていしうと
あつとていしうへちちのちのちとていしうとていしうとていしうと
ていしうとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうと
ていしうとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうと
ていしうとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうと

このむとつうひとていしうとていしうとていしうとていしうと
つとあはくはめあめあめあめあめあめあめあめあめあめあめあめ
ごんの名のきごうごうとていしうとていしうとていしうとていしうと
みあごうごうとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうと
あつとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうと
あつとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうと
あつとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうと
あつとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうと
あつとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうと
あつとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうと
あつとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうとていしうと

上 107 111

下

喜服
居士



法々々と
お持名
の
新



背隠す
肩元
あはれなく
ハタ

ちかけありの日さるん一俣いがまんが来きあん一たこの
 不ふ図とあひびうてあまのちあひまるあがあひん
 むしんせうて五あめらうつこのとまぐふふ大考おほもま
 までわうて男おとこの身みがあるうらそのまんと疾ね
 むふつとあまのんぎるうらうらうらとあまのまふま
 まのまなくせうくお通あそるのせ日ひのふつひは
 うあまの一日いちにちのあまひもあてのらじじはは記き
 ちうけてあううらうらと仲なつの所ところもあそびふてま

ちうふまうく一いっ件けんあもあまのあまののい俣いがまんの
 あうげとあうてあまなくあまのあまのあまのあまの
 ちうてあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 れとちうあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 ちうまといちいち麻あさ風かぜあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 の字あざあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 ちうてあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 ちうてあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

五ノ二ノ一
五ノ二ノ二
五ノ二ノ三
五ノ二ノ四
五ノ二ノ五
五ノ二ノ六
五ノ二ノ七
五ノ二ノ八
五ノ二ノ九
五ノ二ノ十
五ノ二ノ十一
五ノ二ノ十二
五ノ二ノ十三
五ノ二ノ十四
五ノ二ノ十五
五ノ二ノ十六
五ノ二ノ十七
五ノ二ノ十八
五ノ二ノ十九
五ノ二ノ二十
五ノ二ノ二十一
五ノ二ノ二十二
五ノ二ノ二十三
五ノ二ノ二十四
五ノ二ノ二十五
五ノ二ノ二十六
五ノ二ノ二十七
五ノ二ノ二十八
五ノ二ノ二十九
五ノ二ノ三十
五ノ二ノ三十一
五ノ二ノ三十二
五ノ二ノ三十三
五ノ二ノ三十四
五ノ二ノ三十五
五ノ二ノ三十六
五ノ二ノ三十七
五ノ二ノ三十八
五ノ二ノ三十九
五ノ二ノ四十
五ノ二ノ四十一
五ノ二ノ四十二
五ノ二ノ四十三
五ノ二ノ四十四
五ノ二ノ四十五
五ノ二ノ四十六
五ノ二ノ四十七
五ノ二ノ四十八
五ノ二ノ四十九
五ノ二ノ五十

五ノ二ノ一
五ノ二ノ二
五ノ二ノ三
五ノ二ノ四
五ノ二ノ五
五ノ二ノ六
五ノ二ノ七
五ノ二ノ八
五ノ二ノ九
五ノ二ノ十
五ノ二ノ十一
五ノ二ノ十二
五ノ二ノ十三
五ノ二ノ十四
五ノ二ノ十五
五ノ二ノ十六
五ノ二ノ十七
五ノ二ノ十八
五ノ二ノ十九
五ノ二ノ二十
五ノ二ノ二十一
五ノ二ノ二十二
五ノ二ノ二十三
五ノ二ノ二十四
五ノ二ノ二十五
五ノ二ノ二十六
五ノ二ノ二十七
五ノ二ノ二十八
五ノ二ノ二十九
五ノ二ノ三十
五ノ二ノ三十一
五ノ二ノ三十二
五ノ二ノ三十三
五ノ二ノ三十四
五ノ二ノ三十五
五ノ二ノ三十六
五ノ二ノ三十七
五ノ二ノ三十八
五ノ二ノ三十九
五ノ二ノ四十
五ノ二ノ四十一
五ノ二ノ四十二
五ノ二ノ四十三
五ノ二ノ四十四
五ノ二ノ四十五
五ノ二ノ四十六
五ノ二ノ四十七
五ノ二ノ四十八
五ノ二ノ四十九
五ノ二ノ五十

「...」

○半可の江湖談

▲... 高法舟の世界... 驚家...

きやー... さんごんも... ちつみ... ち... 透る... ま...

生葱

や

た連を

まきこ

せり

あぐら

稲

故

鳥辺山人



流傳もさうあう小男の事 彼人と俱小新巻をいつとんで
 海岸へひのてきこ大八車へ「フラとケツト」を志望するは
 あひののをきあぢの車力あ人せやとひここのあぐら
 ところへらま通う人か車の性サホサ目まぐるい
 中へへンサカホイでひびくじうせむ信義の信あめらが
 あぐらたりのの木さんまよの本あさる男をを耳目にあま
 老大通りせり信所へかッて急店をた(ま)り横山所を
 直踏小本町宝町をくくつらるのうが日本橋まら

甚五郎ご子人物と云ると極貸打が細工も手
あそびく日本一と云う日本一であらひな
中の室とあつめく渉るのあく心で楷
ほありと云うそのと記せよゆんは
榎岳先生と平親雷先生ふのま
やの地のつれもあつてあつた後
けてあつたふと云うチヤあめくへ
ねくつれ写生好の小庭流波と云
うの先生を云う

ゆんるもイサふと云うせのあり
あめく附合つと云う横山町の
この園で蹴鞠のえせ初を周絶
た清簪があるヨ出方のものが
大又と云うそくしと云う鞠香と
脱ぎしと云うこのの書でも
大又と云うのまはと云うの
ちでむと云うと改名しと云う
あそびくと改名しと云うあそび
木のせと云う

書海系仲付白波といふ外敷と出して桂女江のまゝに
 小僧新者の傳を返しとてころが五百六百づまのちんの
 大入で実入があらうとてころがふくまゝとてころ
 浮字ふるまッてある後家輔一所持のふくまゝとてあ
 らんで面であらうといふのちねく控とてと怒らば
 門もふみやげせりといふとてころに東系へ来と
 不のめりしてあるあととてころの後家とのが追ッ
 けてきとてころちりてんまゝ目おありとてころイ

産科であらふるといふとてころの市がさういふといふ
 イヤ世の中とてころとてころとてころとてころとてころ
 ののこ子。タかの自己とてころとてころとてころとてころ
 哉後者やねとてころとてころとてころとてころとてころの
 ぞぞ一昨日北内の河作が来てあるぞとてころとてころの
 ちんせろがあるといふとてころとてころとてころとてころとてころ
 そのあととてころとてころの魯文が西洋粟毛のといふにた
 ちんせろがあるといふとてころとてころとてころとてころとてころ

